

編集委員会便り

5月号は、エネルギー技術の評価に関して主に方法論を中心に各分野の専門家の方々に書いていただいた。ここに挙げたものには個別エネルギー技術の評価にとって基本的に大切なものも含まれているし、エネルギー技術全体を社会的に位置づけるために必要なものも入っている。もちろんこれら以外にも大切な方法もあるが雑誌としての紙数もあり今回は一部しか掲載できなかった。また別な機会があれば異なった視点から企画を試みたい。

しかし技術評価というものは重要であるが一方では大変に難しいものである。筆者も数年前まで技術評価に関する研究に従事していたことがあり、どのようなフレームワークで技術評価を行えばよいかいろいろ考えてみたがあまり十分な結論を出せなかった記憶がある。

技術評価の重要性に関しては、いまさら述べるまでもないが、一つだけ述べるならば世の中には技術評価に対して十分な努力もはらわずに実行され失敗していくプロジェクトが決して少なくないということである。研究開発プロジェクトは一度動きだし組織ができ予算がついてしまうと、疑問が持つ人が多くてもなかなか止まらなくなってしまうことが多い。このようなことは公的な技術開発ばかりでなく民間企業でもかなりみられる。そのことによって組織の将来を危うくすることもあるし、社会的損失も伴う。社会に無駄はつきものであると割り切ってしまうたくはない。

技術評価の難しさについてだが、評価対象に関して十分なデータがない、適切な評価の方法がない、というようなことだけが、技術評価の難しさではない。技術評価の対象である技術は、単純なフレームワークでは扱えないような複雑な構造を持っており、しかもデータが不足している上に国家、企業、個人の将来や利害

がからんでいるのだから始末が悪いのである。

一般に世の中で行われている技術評価は、現在利用可能なデータの範囲ということに限ってもそれを十分活用したいという意味で正しい、いわば正直な評価がいつもされているわけではない。しばしば評価は、政策や利害の渦中にあるためそう単純な形で実行されるわけでない。評価には多くの未知の要素がありしばしばそれは政策的にコントロールされる。もちろんこの事が単純に悪いといっているのではない。技術評価にはもともと限界がありそれを過信することもできない。政策的誘導もときには必要である。しかし技術評価をあまり意図的に利用したりあるいは軽視すると計画の失敗の可能性が高まり、社会全体としては長期的に大きな損失を被る。そのためには客観的な評価の方法だけでなく、評価の哲学あるいは原則が必要であるような気がする。

技術評価の問題点を挙げればきりががないが、評価する人も問題である。政策決定者と技術者というような明らかに異なる人々の間だけでなく、技術者の間にもいろいろ考えの相違もある。技術評価には、個別技術に詳しい専門家も必要だが、全体的な評価のフレームワークを考える技術者も必要である。このような人々の間でさえ意見はいろいろと異なり、容易には意思疎通することができないこともある。

もちろん、現代は科学技術と市場経済のもとにあり、個々の技術評価にはいろいろな問題があっても社会全体としては次第に正しい方に制御されていくわけだが、無駄な道草をなるべくしないようにすべきなのであろう。それが評価の役目なのかもしれない。今後、技術評価がますます盛んになることを望みたい。

齊藤雄志
(専修大学経営学部教授)